

『父の横顔』 - そら

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

父と私を乗せた新幹線が五月ののどかな日差しの中を進んでいく。田んぼや畑がすごいスピードで通り過ぎていく。私は窓側に座り、通路側に父が座っていた。久しぶりの旅行、さらに、久しぶりに父と二人きりになれたことで少し私はうきうきしていた。「久しぶりに温泉にでも行こうか」と誘われたのだ。

私は、小さい頃からお父さんっこだった。七歳下の妹が生まれる前はよく父と二人だけのお出掛けを楽しんでいたからかもしれない。行き先は遊園地、動物園、水族館といった子供が喜びそうな所ではなく、父の大学の友人の家、隣の父方の親戚の家などで、ほとんどは父の用事に付いていただけだった。でも私は父と二人きりのお出掛けというだけで嬉しかった。行った先では、父が難しい話をしている間、子供がいれば子供同士で遊んだりした。が、いないことも多く、そんな時はその奥さんとボール遊びをしたり、お料理を作ったりして遊んだ。母と遊んだことよりも、行った先々の奥さんと遊んだことの方がよく覚えている。

母は私が保育園の頃から、小学校の漢字や算数、それに加えて簡単な英語を教え込もうとしていた。どうしても英語の発音が出来なくて、夜遅くまで寝かせてもらえなかったのをぼんやりと覚えている。泣きながら発音していた。涙ににじんだ時計の針は十時五十五分をさしていた。母は完璧主義者だったのだと思う。なんでもきっちりこなさなくては気がすまなかったらしい。だから、子育てに関しても完璧を求めていたのだと思う。その点、父は母とは正反対だった。のんびり穏やかな性格で、怒られた記憶がほとんどない。礼儀作法には厳しかったが、母ほどではなかった。私が母に怒られた時にはよく慰めたり、私が勉強漬けにならないように外に連れ出したりしてくれたものだ。私が母よりも父になついたのは自然の成り行きだったと思う。父は仕事が休みの日には、幼い私にいきなり、「出かけよう」と声をかけ、ろくに行き先も告げないまま電車に乗せることがよくあった。子供の私は、小さな心を「どこに行くのだろうか？」という不安と、「きっと楽しいことが待っているに違いない」という期待でいっぱい膨らませて電車の窓の外を見ていたものだった。今でも、「お父さんっこ」はなおっていない。「そんなんだから、いつまでたっても結婚出来ないのよ」と、よく学生結婚した妹や既婚の友人に呆れられている。

大学入学と同時に実家を出た。一緒にいるといつも喧嘩になってしまう母親とは、一緒に暮らしていけないと思ったからだ。他県で就職してからは、ほとんど帰らない。百貨店に勤めていて、フロア主任という結構責任ある仕事を任されている。お陰で年末年始もお盆も休みが取れない。でも、家に帰らなくなった最大の理由は両親が私達に相談も無しに熟年離婚したことだろう。妹が結婚した翌年の五月に両親は勝手に離婚したのだ。父から葉書がいきなりきて、「離婚しました」と簡単に書かれているだけだった。私と妹が急いで実家に帰ると、もう母は出て行った後で、父は、母の行き先は知らないと言って、私達と目を合わせようとしなかった。離婚の理由もはっきりしなかった。両親は私達から見てもごく普通の人たちだったから。私が小学校の高学年から中学校にかけての頃は時々喧嘩もしていたが、高校生になる頃には、喧嘩することもなくなり「いて当たり前」、そんな感じだった。それなのにいきなりの離婚に私は納得がいかなかった。だが、落ち込んでいる様子の父には追及出来なかったし、妹は結婚して籍は抜いているし、私も完全に自立しているので何も聞けず、二人の間で何があったのかは謎だった。

離婚してもうそろそろ五年経つという四月の半ばに、父親から電話があった。電話を通して久しぶりに聞いた父の声はなんだか疲れているような感じだった。父は普段は普通の声だが、電話となると大きな声になったものだった。それなのに今回の電話

の声は、小さくて弱々しかった。父の年齢を実感させられた。年老いた男の一人暮らし。苦労も多いに違いない。

その電話でこの旅行の話が出たのだ。珍しいことだった。私が成人してからは父の方から一緒に旅行しようなんて誘うのは今まででまずなかった。兎に角、五月の連休は休みをとって、連休の最初の日には旅行の準備をして実家に帰ってくるように言われた。実家から一緒に駅に行こうとのことだった。妹はもう結婚して他家に嫁いでしまっているのに誘いにくい、独身の私は気軽に誘えるのだろう。私は電話で父と旅行の計画を立てながら、これを機会に父との同居の話をかちんと考えようという気持ちになっていた。七十も過ぎて、そろそろそういう時期だろう。

アナウンスがまもなく駅に着くことを告げ、乗客に乗り換えの案内をしていた。私達の降りるK駅までは、あと二時間。K駅に着いたら各駅停車に乗り換え、温泉地で有名なB駅に着く。

「あと二時間近く乗ってなきゃいけないよ。疲れたね」

「……ああ」

私が声をかけても父は本に集中して生返事しか返してくれない。本屋名と住所、電話番号が書かれた水色の紙のブックカバーが、その本を父が近くの本屋で買ったことを教えてくれる。本屋でただで付けてくれるブックカバーにしてはお洒落だ。並木道を走る自転車が影絵みたいに黒一色で描かれている。私と父との会話の時間を奪う本が恨めしくなって私は少しその自転車を睨んでいた。でも、私は気を取り直して窓の外に目を移した。

電車がホームに滑り込んだ。走っていた風景とはどうしても合わない近代的な造りのホームだ。どうも新幹線の駅はどこも気に入らない。まわりの風景とバランスが取れてない。まあ田畑をつぶして造ったのだから、当たり前と言ったら当たり前なのだが。

ドアが開き賑やかな家族連れが乗り込んできた。五歳位の男の子と三歳くらいの女の子がはしゃいで、大きな声で騒いでいた。きっと初めての新幹線なのだろう。お父さんとお母さんと思われる二人が「静かにして」と注意しているがほとんど言うことを聞いていない。私も父と初めて電車に乗った時はしゃぎまくっていたに違いない、声が人一倍大きな子供だったからきつとうるさかただろうな、となんとなくその頃の父に同情してしまった。家族連れは私達の三列くらい前に座ったようだった。その家族連れの後には、大きなピンク色のバッグを抱えたおばさんも乗ってきた。バッグの側面は網になっていて、中からくんと犬の鳴く声が聞こえてくる。新幹線ってペットOKだったっけ？ と小さな疑問が浮かんだが、別にいいかと頭から排除した。父はこんなうるさい中でも熱心に本を読み続けていた。時折、シャツの胸ポケットに入れている細いシャーペンで線を引いたりしている。

「新幹線の柵、あるじゃん？ あれさ、電車止まってから開く方がいいよね」

少し大きな声で父に言ってみる。と、今度は私の声に返事してくれた。

「あ？ よく見てなかったよ」

「あのね。電車がホームに入ってきたら開くんだけど、まだ、電車が動いているんだよ。危ないよね」

「う～ん」

ダメだ。話が續かない。それでもなんとか話をもたせようとして私は話し続けた。

「お父さん。なんか疲れていない？」

「え？ ああ……」

「本閉じて少し寝たら？」

「う……うーん」

「ほらっ」

私は父の本をとろうと手を伸ばすと、父はびっくりして、手から本を床に落とす。ブックカバーが外れ、表紙があらわになった。

『大切な人が認知症になった～家族による介護』

「え？」

私はなんで父がこんな本を読んでいるのか分からなかった。だいいち、父が読む本はいつも推理小説か仕事関係の経済の本だったからだ。父は七十二歳。嫌な予感が頭をかすめた。

「お父さん、訊いてもいいよね。どうして、こんな本読んでいるの？」

父は私から目を逸らし、本をゆっくりした動作で拾い上げる。腰を曲げるのが少し辛いようで、ふうっと声が漏れる。

「ちょっと便所行ってくる」

「お父さんっ」

父は私の呼びかけを無視してごそごそ準備を始める。禁煙席だから、禁煙室にタバコでも吸いに行くのだろうか。小さめの黒いバックに読んでた本を入れて立ち上がり、歩いていってしまった。

私は父を見送ると、窓の外に目を移した。青々とした田んぼの緑が目飛び込んでくる。遠くの方には小さく民家が見えていたが、ほぼ一面田んぼだった。

わぁっという歓声が前の方から聞こえてきた。さっきの子供達の声のようだった。どうやらお弁当を広げたらしい。周りの客もそれぞれ弁当を広げ始めていた。食べ物の匂いが車内に広がっていた。

それにしても、父の読んでいた本の内容が気になる。どういうことだろう。さっきはびっくりして、まさか父が？ と思ったが、あの専門的な本を読んでいる時点で父がボケているというのはどうしても考えにくい。大丈夫といていいと思う。そうすると、誰だろう？ ただ、今後のために知っておくべきだから、ということなのだったら、父がトイレに逃げ出すなんてことはしないだろう。少し前に痴呆になった祖母を次女が介護するノンフィクションがドラマ化されたのを私も見ていた。夜中に騒ぎ出したり、徘徊したり、家庭の暮らしはめちゃくちゃになっていた。まさか、そろそろ老人ホームにでも入ろうとでも思っているのだろうか？ その話をするために私を旅行に誘ったとでもいうのだろうか？

一人で悶々と考えていたら、二十分くらいして父が戻ってきた。

「お父さん」

「分かったよ。そう睨むな」

父はまたゆっくりした動作で私の隣に座った。

「母さんだよ」

酔っている時以外で父の口からその言葉を聞くのは何年ぶりだろう。父と母が離婚して、もうすぐ五年になる。その間、私達の間で母のことが話されることはほとんどなかった。妹と私はなんとなく父の味方だった。というのも、酔った父の話の聞くと、どうやら母が一方的に出て行ったような感じだったからだ。

「母さんがその病気なんだよ」

「何それ？」

私は自分でもびっくりするくらいそっけない声を出していた。父は黙って前を見つめている。

「……………」

「いまさら何の関係があるの？ 勝手に出て行った母さんのことなんていまさら……………」

母は父を捨てて出て行ったのだ。五年もたっていまさら病気になったからって父に頼ってくるなんておかしいじゃないか。父も父だ。お人好しにも程がある。

「……母さんを恨んでいるのか？」

「……………」

恨みまではいかないかもしれないけど、恨んでないとも言えない。昔から馬が合わなかった上に、二人の離婚には納得にはいかなかったのは確かだ。父を見捨てるように家を出て行った母にも、それを許した父にも、納得がいかなかった。

「お前が恨んでいるのも仕方ないかもしれないが……。母さんが出て行ったのは、病気が理由らしいんだ」

「え？」

母は父に何の相談もなしに施設に入ったらしい。自分の記憶力が激しく低下してきて、掃除、洗濯などの家事がうまくこなせなくなったり、買い物しようとしていたのに、道の途中でどこに行こうとしていたのか分からなくなったり。完璧主義の母にはそんな自分の衰えが許せなかったらしい。「なんでこれくらいのことが出来ないのか」、「これくらいのことが出来なくては皆に馬鹿にされるのではないか」と、だんだん鬱状態に陥っていったのだそうだ。父に離婚を願い出て、自分の実家に近い施設を探し、細々したことは全部妹に、つまり、私の叔母に任せて……。

「一言も言わずに出ていったのは、父さんやお前達に迷惑かけたくなくて、らしいんだ。ボケの症状もそんなにひどくなくて、父さんはただの度忘れくらいにしか思わなかった。父さんたちの歳ならそう珍しいことでもないだろ？ だから母さんが鬱状態になっていたなんて気づいてやれなかった。いきなり書置きを残して出て行って、母さんの実家から、どうしてもやりたいことがあるから何も言わずに別れてくれと書かれた手紙が送られてきた時、子供二人育て上げて、もう親としての仕事は終わっていたから、俺も強くは引き止められなかったんだ。電話しても出てくれないし、父さんが行っても会ってもくれなかったからね。三十年以上も一緒にいてくれて家のこともしっかりやってくれた母さんだから、老後はゆっくり二人で過ごしたいと思ったんだけど……。どうしてもってきかなかったから、好きにさせた方がいいんだと思ったんだよ」

私は黙って聞いていた。

「雅代さんがな、知らせてくれたんだよ」

私は父の話を聞きながら、人のよさそうなふっくらした、叔母の顔を思い浮かべた。小さい頃時々遊びに行くところ馳走をたくさん作って出迎えてくれ、毎年、冬にはみかんを、初夏には梅干を送ってくれていた。母が出て行ってからは、遠慮してどちらともなく交流はなくなっていた。

父が静かな声で続ける。

「とうとう、母さん……」

父はそこでいったん言葉を切って、ふっと息を吐き出した。続きを聞くのが怖かった。

「……もうすべて分からなくなったそうだ」

目の前が真っ暗とはこのことをいうのだろうか。窓の外の空はこんなに明るいのに、自分とはかけ離れているように感じて、自分だけが周りとは見えないガラスで仕切られているような……。

それからしばらくの間父と私は何も話さなかった。

私達が母の実家に向かっていることは父の言葉で分かった。確か母の実家はK市の郊外だ。K駅から市バスに乗り換えて三十分くらい。さらにそこから歩いて二十分位だったろうか。もうずいぶん行ってないので詳しい道までは覚えていない。私達が行って何が出来るわけじゃない。でも行かずにはいられなかったのだと思う。父としては頼って欲しかっただろう。勿論私も頼って欲しかった。馬が合わないとはいえ自分の母親だ。素人だし、何かが出来るわけじゃない。でも、家族なんだから。いや、家族にこそできることがあると信じたい。

電車は何事もなかったように町や田畑を通り過ぎていく。乗客も食後の眠気に襲われてか、コクリコクリと居眠りを始めるものが増えてきた。ゆったりした幸せな午後。なのに私と父だけがその幸せから取り残されているような気分だった。この車内には起きているものは二人だけで、他の乗客は皆幸せの眠りについていてのではないかと思えるくらい静かだった。さっきまで騒いでいた子供達も、はしゃぎ疲れて眠ってしまったようだ。乗ってきた時はくんくん鳴いていた犬も今はもう静かだ。聞こえる音といえば、新幹線のゴーっという音以外は、時折壁にかけてあるコンビニのビニル袋がカサカサ揺れて音を立てる音が聞こえるくらいだった。

本当に私達父子だけが取り残されているのではないか。

怖くなった。

ちらりと隣の父の姿を盗み見た。髪は薄くなり、ほとんど白髪になっていた。鼻の下とあごに残った無精ひげも白色だ。母が父のもとを去って、急にふけ込んだ気がしていた。父なりに母のことを心配していたのだろう。父はまたさっきの本を読んでいて、左手にはシャーペンを持ち、時々線を引いたりしながら読んでいる。父が読み終わった後のページは角が丸まり、縁はふにやふにやになって、そして、少し黒ずんでいた。

「お父さん」

すごく小さい声で呼びかけてみた。父には聞こえなかったらしい。じっとその横顔を見つめる。

私にだって母を思う気持ちはある。母をあまり好きになれなかったけど、年を取るにつけて自分の中に母親を見つけることが多くなった気がする。

神経質、完璧主義。

恋人とうまくいかなくなる時は決まってそういうのが邪魔をした。

——お前と一緒にいるのは疲れる……。

恋人として最初はうまく行くけど、決して長くは続かないし、結婚まではいかない。

結婚は出来ないけど、責任感の強さと完璧主義のお陰で仕事はうまくいく。勤めている店舗のフロア任の中で女は私だけだったし、全店含めても一番若い。

私は紛れもなくあの母親の子供なのだ。その事実逆天に逆らう事は出来ない。だから、自分の中に母を嫌いつつ、憎みきれない。

母が家を出たのは、家族を思っただけのことだという。主婦として家事をしっかりと出来なくなり、自分の責任を果たせなくなって鬱にまでなった。

完璧主義で神経質な母と穏やかな父。合わないようであれでなんだかんだうまくいっていた。互いに互いの欠点を補い合う。ちゃんとそこには愛情があるのだ。そしてその二人から産まれてきた、私達姉妹……。

父は、横でずっと見つめている私のことなんか見向きもせず、ずっと本を読み続けている。その目には、大切な母を助けたいという強い想いがあるように感じる。

「お父さん」

今度はさっきより少し大きな声で呼びかけてみた。

「ん？」

父が顔をあげこちらを向いた。穏やかなまなざしで私を見ていた。私はこみ上げてきた感情をそのまま口に出そうになった。けど、少し恥ずかしいのでやめておくことにした。

「うん。なんでもない」

そう答えて、私がまた窓の方に向き直った時、アナウンスがまた、次の駅にもうすぐ到着することを告げた。数人の乗客が立ち上がり、準備を始めていた。

[戻る](#)